

# 異文化コミュニケーション研究の 英語教育への取り組み\*

高井 收

## 1. はじめに

日常の授業で、日本人対象に英語を教えていると、こういうやり方でやっ  
ていて本当にいいのだろうかと考えさせられることが多い。英語教育の改善  
にコミュニケーション能力の養成が叫ばれてから久しいが、最近の日本にお  
ける学習者対象のアンケート調査などによると、大学生、社会人の望む英語  
教育は「外国人とコミュニケーションが出来るようになること」を第一の目  
的に掲げている。そして、そのコミュニケーションとは英語の運用力と定義  
され、「英語を母語とする人達の言葉の能力に基準がおかれ、その力に限りな  
く近づくものである」と考えられている。そもそも、オーセンティシティー  
という言葉も良く耳にするが、これも、ネイティブスピーカーの能力に基準  
をおいたものではなからうか。

従来、我々は日本の英語教育においてネイティブスピーカーの英語をモデ  
ルとしてきた。戦前はイギリス英語に、また、戦後はアメリカ英語にそのモ  
デルを求めてきた。そして、英語教育の究極的目的はいかにネイティブスピー  
カーのようになるかを目指してきたと言えよう。このような視点を持つ英語  
教育では、英語は先生やネイティブスピーカーと話すときに用いられ、外国  
の雰囲気、環境の中で使われるものであると考えられる。また、学習者が自  
分の使う英語が正しいかどうかを常に先生または、ネイティブスピーカーの  
判断に頼らなければならず、自分に自信が持てない状態であった。しかし、  
世界には多種・多様な英語が使われているのが現実である。国際的に受容性  
のある英語であれば、それぞれ文化的に多様な価値観を持った英語で通用す

と思われる。英語は、それを母語として話している人達が大勢いる生きた言語である以上、彼らの文化と切り離して考えることはできないが、国際的な立場においては、お互いの文化を認め、自然な共存をめざした異文化理解の上に立った英語教育が望まれる。

これからは、学習者自身の英語が、内容を伝達する立派な言葉であり、自分の考えを表現する言葉であるという自覚を学習者に持たせなければならない。自分の生活する文化環境の中で英語を言葉として使用させるような教え方の手がかりは無いものかと痛切に感ずる。

本論では、そのような手がかりの一つとして、これまで研究されてきた言語習得理論を考慮に入れながら外国語の学習において、なぜ自分が持っている文化的背景知識が大切なのかを考察し、自文化を利用した英語教授法の一つとして俳句を利用した英語教育を取り上げ、その歴史と現状を概観し、異文化理解に基づく英語教育の基礎を創り出そうとするものである。

## 2. 言語習得理論をめぐる考察

最近、日本の英語教育の現場においてもコミュニケーションを主体とした指導法、いわゆる「コミュニケーション型指導法」が盛んに用いられるようになった。これも一つに過去2、30年の間に長足の進歩を遂げた第二言語習得理論の影響による。その中で、いち早く我々の目を引いたのは、Krashen (1985)の言語習得仮説であった。この仮説は学習者にとってどれだけ意味内容が理解できる入力（インプット）を与えるかと言う、いわば「内容理解型（comprehension-based）のアプローチ（Skehan 1998）」である。彼によると、出来るだけ多くの「学習者にとって理解可能な入力」を学習者に与えることによって、言語の構造・規則は無意識に習得されると言う。その際、一つの条件があり、学習者の「情意フィルター」が高いか、低いかの差によって入力がLAD「言語習得装置」に達するかどうかが決定的な要因になると言う。すなわち、学習者のモチベーションが弱い場合や、または間違いを恐れるばかりに不安を感じ過ぎれば、「情意フィルター」は高くなりメンタルブロックの役割

をしてしまい、言語は習得されないと言うことである。これら一連の仮説は無意識的と意識的とを区別する基準が非科学的で、それぞれの過程が検証できない点と、また、入力偏重の仮説において、入力された情報がいかに習得につながるのか明確でない点が指摘された。現在では言語習得を考える場合には入力だけではなく、習得過程における表出（アウトプット）の役割も認めることが常識となってきた。

それに伴い、Long (1987) は学習者が言語を習得する際には、話し手と聞き手の意味交渉によるインタラクションが重要であると言った。すなわち、実際のコミュニケーションの場ではお互いの持っている情報を交換することにより、その情報のギャップを徐々に埋めて行くことになり、そういった過程を通してお互いが理解をし合うことになる。インタラクションを通してインプットの文法的な複雑性などが学習者のレベルに徐々に合わせられることによって、「理解可能なインプット」になると言う。Swain (1985) はインプットだけでは不十分であり、むしろ「理解可能なアウトプット」が言語習得を可能にすると言う。学習者はアウトプットすることにより、自分の中間言語（インターランゲージ）と目標言語とのギャップに気づき、自分で分析し、修正するきっかけができると考えられた。すなわち、学習者が自分のインターランゲージを用いて仮説を立て、それをまた自分で検証して行く過程に注目している「過程型 (processing-based) のアプローチ (Skehan 1998)」であると言える。

言語習得過程において中間言語は段階的発展をとげるという考え方は認知心理学の領域で「言語の意味の理解や習得は認知力の発達に負っている (片山・他 1999)」と考えられている。第2言語習得においても認識過程は新しい情報を既得の認知構造と関連付け、学習を成立させて行く能力があるという。これはその後、スキーマ (認知の枠組み) 理論として展開された。日本人が英語を学ぶ際にも、英語という自分の言語とは異なった記号の世界における言語知識、すなわち言語の規則体系 (形式スキーマ) を学習しなければならないと同時に、英語が使われている文化・環境の背景知識 (内容スキーマ)

も習得しなければならない。言語習得理論における究極の目的はその言語の規則体系を自分のものとし、自分の言葉として実感できるようになることであり、そうすることによって始めて日常のコミュニケーションの中でその言語を自由に使えるようになるのである。そして、その過程を考えてみると、それには認知力の発達と同じように、段階的な発展を示していることがわかる。次に、言語能力の発達モデルを取り上げ、言語知識（形式スキーマ）と文化的背景知識（内容スキーマ）の関係を考察する。

## 2-1. 言語能力発達モデル

Cummins (1983) は言語能力の発達の様相を、学習者が言語知識を理解する際に与えられるコンテキストによる背景知識の量と認知力の関係から説明している(図1参照)。横軸には、言語的な理解や表現に必要な背景知識からの補助の程度を表わす。一方の極はコンテキストに埋め込まれたコミュニケーション、他方の極は制限されたコンテキストの下で行われるコミュニケーションを指す。前者では、伝達されるメッセージに関わるフィードバックを、ジェスチャーや、その場の状況、経験的知識などのコンテキストで補って、コミュニケーションが行われる。お互い良く知っているもの同士が、共通の話題で会話をする場合などがこれに当たる。後者では、こうしたコンテキストからの助けは無く、メッセージの理解や伝達は言語情報のみに依存する。背景知識は余り使えず、言葉の詳しい知識が要求される。アカデミックなトピックの講演を聴いている場合などがこれに当たる。

縦軸はコミュニケーションにおける認知能力の必要度を示す。縦軸の下方の極は認知能力が要求されるコミュニケーション活動で、学習者にとって難しく感じることである。例えば、習い始めの外国語はたどたどしく、簡単なことでも苦勞しなければ話し出せない場合がある。縦軸の上方の極は認知能力が余り必要ではなくなったコミュニケーション活動で、学習者にとってコミュニケーションすることが苦痛に感じなくなることである。先の例でその外国語をマスターするに従って、ある構文や決り文句など、余り考えずとも

自動的に口に出てくるようになる場合がこれに相当する。

Cummins によれば、言語能力はこの縦横両軸によってできた4つの平面の、左下(A)から、左上の平面(B)にそして、右下(C)から右上の平面(D)に向かって、習得が進むことにより移動すると仮定される。英語教育の視点から考えれば、それぞれの音声面、構造面などの言語運用能力は最初はコンテキストの豊富な環境の下でのコミュニケーション活動を通して、発達すると考えられ、学習者は徐々にコンテキストの助けを受けずとも英語でのコミュニケーションが出来るようになって考えられる。

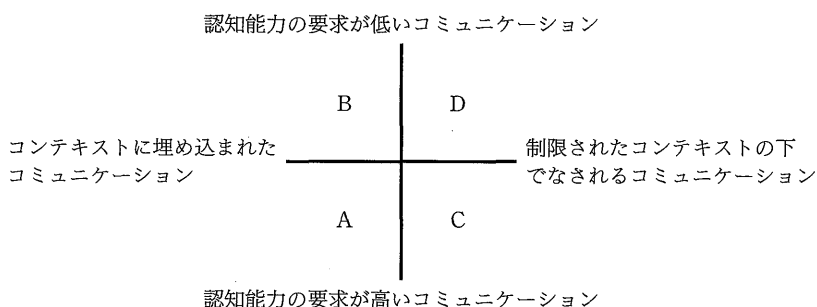


図 1

## 2-2. 言語能力発達モデルの中での文化的背景知識の位置付け

上記のモデル(図1.)の示唆するところは、新しい言語知識またはスキルを習得するという事は、学習者がそれぞれの学習項目を認知的に見て過重な負担がなく、自由に使いこなせるようになることである。その際、大切なことはコンテキストの豊富な環境の下で始めることである。学習者の立場にしてみれば、外国語である英語の言語知識(形式スキーマ)を学習する際、コンテキストの一つである文化など背景知識(内容スキーマ)は学習者がすでに持っているものが利用できれば学習の負担が軽減されると考えられる。これまでの英語教育において自己表現の指導と言えば、英語国の考え方、文化に沿って、英語での表現方法を学習させてきたと思われる。学習者は新し

い言語構造や発音に触れ、少なからずショックを受けている上に、さらに、文化的なショックも重なるわけである。学習者自身が慣れ親しんだ文化的な背景知識を利用して英語で自己表現が出来るように指導して行けば、学習者に余分な負担をかけずに英語をもっと身近に感じさせることができるのではないだろうか。そこで、その一例として俳句を利用した英語教育を考える。

### 3. 英語の俳句を指導にとり入れる利点

俳句は3行17音と短い詩のかたちをしており誰にでも覚えやすく、日常的な事柄を取り上げ、そのリズムは町の標語にも使われたりして、日本人には親しみ深いものとなっている。多くの人は小学校時代に国語の授業で学んだことがあると思われる。次に俳句を英語の授業に取り入れる利点を挙げて考察する。

(1) 日本人学習者にとって自分の文化が再確認できる。

通常、英語という言語を扱う場合、どうしても、その言語の持つ文化圏の教材を使用することが多くなる。これは、西洋の文化や知識を取り入れるために発達してきた訳読法にも影響されている事もあるが、コミュニケーション主体の英語教授法が紹介されることになり、オーセンティックな教材が使用されるようになってきたことにもその原因があると考えられる。

わが国で長い歴史を持つ俳句を英語教育に導入することにより、一般的に古臭いと考えられているような俳句に新鮮さを持たせ、国際的な場面において自分の文化であることが再認識されると考えられる。

(2) 英語が日常化できる。

英語圏の国において英語を学ぶ場合と異なり、日本においては日常的に英語を使う機会が無いに等しい。俳句は日常的に起こった事象や自分の周りに在る自然を対象にして作ることから、英語の俳句を作ることにより学習者は自分の日常生活の中で英語を考える機会を多く持つことになる。自分の周りにある身近な話題を取り上げ、それを英語で表現しようとするところから、英語が日常生活の中に入って行くことになると考えられる。

(3) 自分の文化を取り扱うので精神的にも余計な負担がかからず、自信を持って作ることができる。

自己表現をする場合、題材に学習者自身が経験もしたことが無いような事象を取り扱うよりは、自分の身近な文化環境の中で俳句を作ることを題材に選ぶことは認知的に考えても、その負担が軽減される。外国語である英語で自己表現するわけであるから、言語的な面だけ考えても認知的な負担が十分かかっていると考えられる。学習者のこうした負担を軽減することにより、英語を使用することに対する動機付けにもなると考えられる。

(4) 短文であることから覚えやすく、口に出して詠むことにより、発音が矯正できる。

短いということは、誰にでも取り付きやすく、作りやすいという特質を持っている。俳句が日本で庶民の詩として広まったのも、そこに、理由の一つがある。また、詩とは本来、リズムにのせてうたいあげ、聞いている人は、耳を通して、身体全体で感じ取るものである。こういった特質を生かし、英語の発音、リズムの修得訓練に活用できると考えられる。

(5) 俳句の写実的な特徴を利用し、英語を単なる単語の羅列ではなく、「意味のかたまり」として学習者にとらえさせることにより、語順、前置詞などの使用に関する基本的な訓練が出来る。

(6) 俳句は英詩に見られるような難しい詩的技法、例えば、メタファーや押韻などを何ら必要とせず、作ろうと思えば誰にでも作ることができる。

#### 4. 俳句とは

俳句は詩の一つであり、口誦性をもっている。詩とは本来、リズムにのせてうたいあげられたもので、そこから人々は耳を通して身体全体で感じ取るものであったと言われる。そこには、作者の気持ち、感情が詠み込まれていて、詩が朗読されることによって、私達は作者と同じ感動を耳にすることができる。その点で俳句は子供にも覚えやすく、ことわざの様に思い出すこともでき、口をついて出てくるものである。

俳句は詩型が 17 音 (5-7-5) であり、英語なら 3 行にまとめられ、取り付きやすく、暗唱されやすい。その反面、短い詩の中に作者の言わんとすることを盛り込み、感情を伝えるにはそれなりの難しさがああり、17 音の中に自然の精妙さや人間の複雑な心理を描こうとするには長年の練習が必要となる。俳句は取り付きやすいと同時に奥の深い文学であると言える。

俳句には大きく二つに分けて叙景句と人事句がある。叙景句は花鳥風月などの自然を中心にうたい。人事句は人間の生活や行事など、人間に関連したことをとりあげ、日常生活に焦点を当てて詠んだものである。そもそも、俳句は自然をうたう詩として出発し、一句の中に季節を表わす言葉、季語を入れた。日本の季節感を詩の中心に据えたのが俳句であり、作者の気持ちを表現するのに直接そのまま表現するのではなく、季語、すなわち、季節感に託して表現した。それによって、私達を取り巻く自然と日常生活の結びつきを体験することができると考えられる。俳句の一番の特色は 5-7-5 という音の型の短さと、季語による自然との結びつきである。

俳句にもう一つ大きな特色がある。特に日本語のリズムを利用し作者の感情を表現する方法として「切れ字」という手法がある。切れ字は、代表的なものに「や」「けり」「かな」「なり」などがあるが、一句の内容を途中で、あるいは終わりに切る働きをしていて、俳句に味わいを深める効果がある。「切る」ことによって一句に独立性を持たせ、余韻を産み出し、作者の気持ちにふさわしいリズムとなって具体的なイメージを伝えるのである。

## 5. Haiku in English

英語で俳句を作る場合、まず考えなければならないのが音のリズムである。句の型が 5-7-5 の 17 音で構成されていて、そのリズムを楽しむと言うのは日本語のシラブルの性質による。日本語のシラブルの単位はモーラと呼ばれ、各モーラはほぼ等間隔で発音される。これを、英語のシラブルを使って、日本語と同じ 17 音の句の型にはめ込もうとすると無理が生じる。英語における各シラブルは等間隔で発音されるのではなく、ストレスが置かれるシラブル



は少し長めに、そうでない場合には短めに発音されるからである。しかし、英語の俳句にも17音の規則を忠実に守ろうとして、17シラブルに一句をまとめようとする動きはあった。“There is a growing tendency to approximate a 5-7-5 syllable form, but so far no experienced poet or editor has advocated an absolutely strict adherence to it.” (Henderson 1997: 31)例として次のような俳句があげてある。

A bitter morning:

Sparrows sitting together

Without any necks. (J. W. Hackett: 1964)

俳句のもう一つの特色は季節感を詠んだ句であるということだ。俳句は日本の四季に基づく季節感を季語に託して表現している。しかし、今や世界中で俳句が詠まれるようになると、その土地、その場所によって、その季節感も異なってくるので、季語は世界各国共通に使えるわけではない。実際、日本においても北海道と沖縄ではその季節感は相当異なってくると思われる。季語を入れなければならないということに対しては、このように実情に即していないということと、形式的なものに過ぎないという批判はあるが、俳句の特質から考えると自然観を入れることが大切だと考えられる。“The vast majority of haiku in English, whatever their form, do treat nature, or some aspect of nature, as an integral part of the poem.” (Henderson 1997: 42)

## 6. 俳句を作る上で大切なこととは

俳句は自分が5官を通して感じたこと、その経験をそのまま文字にしたものであり、読む人が作者と同じような感覚を経験できるように表現されるものである。読むことにより頭の中にイメージが湧いてこなければならない。ちょうど作者が経験した環境・情景を絵によって描写することと同じである。

具体性を持った絵が描けるように、そういったイメージが沸くように俳句も書いてゆくのであると考えられる。

俳句の中心は感動したもの、出来事などを読者に追体験させることであり、そのことをこまごまと文字によって説明することではない。読む側は俳句で作者が表わそうとしている、その時の感動を追体験するために読んでいても考えられる。作者は自分が経験した感動や出来事を読者と分かち合うことであって、どのような感情 (How do you feel? I am sad.) ではなく、なぜそのような気持ちになったか。何がそうさせたか (What makes you sad?) を書くのである。

日本語で俳句を作る場合は5-7-5の音のリズムに注意し、季節を示す言葉、季語を一つだけ入れるように心がけるが、英語の場合には、およそ全体で17シラブルを目安に三行にまとめ、季節を示す言葉、季語を一つだけ入れるように心がければ良いと考えられる。俳句の「切れ字」について、英語で表わす場合にはコロンやドットで表わしたりする場合がある。“Another question of form in which haiku written in English cannot possibly follow their classical Japanese prototypes is in the use of conventional kireji (cutting-words) such as ya and kana... Ya is often very much like a colon (:), but not always; kana, which is usually used to end a haiku, is often very much like a row of dots (...), but not always.” (Henderson 1997: 33)

## 7. 俳句の歴史

俳句の歴史を辿れば非常に長くなるわけだが、ここではほんの概略だけ述べてみる。俳句の起源は「万葉集」(759年)、「古今集」(905年)などの和歌までさかのぼるといわれている。それは和歌の形式、5-7-5-7-7の31音の中で、自然の景色を通して、人間の感情を歌い上げたものである。

見渡せば 花ももみじも なかりけり

浦のどまやの 秋の夕暮れ——藤原定家「新古今集」(1205年)

途中で一つの和歌を二人で作るといった遊びが始まり、それが形式化され連歌と呼ばれるようになった。連歌は複数の作者の共同作業によって作られる歌で、5-7-5の17音から成る詩行と、7-7の14音から成る詩行を、その場に参加した者が交互に継ぎ足して行くものである。二人で一種の歌を作ることを短連歌と呼んだ。

田にはむ駒は 黒にぞありける —— 永源法師

苗代の 水にはかげと 見えつれど —— 永成法師

苗代の 水にはかげと 見えつれど

田にはむ駒は 黒にぞありける —— 「金葉集」(1127年)

これが面白いと言って次第に何人かで付き合いを試みる。これを長連歌と言った。

奈良の都を思いこそやれ —— 1人目

八重桜秋のもみじはいかならん —— 2人目

しぐるるたびに色や重なる —— 3人目「今鏡」(1170年)

連歌は貴族の間に広まり、風雅、雅を求めるようになった。また、作法の中に古典の故事を引用したりして、アカデミックな詩でもあった。

雪ながら山もとかすむ夕べかな —— 飯尾宗祇

行く水遠く梅匂ふ里 —— 牡丹花消柏

川風にひとむら柳春みえて —— 柴屋軒宋長「水無瀬三吟(みなせさんぎん)」(1488)

16世紀になると山崎宗鑑や荒木田守武などの頃から行われた卑俗・滑稽を

中心とする連歌である「俳諧」が流行するようになった。俳諧は俳諧連歌の略で、17音と14音の詩行の組み合わせで、当世風の笑いを詠んだもので、パロディーや語呂合わせが多用された。

江戸時代に入り松尾芭蕉が出て、俳諧は俳諧連歌の最初の一行だけで鑑賞されるようになった。連歌や俳諧連歌の第一行目にくる5-7-5の17音は「発句」と呼ばれ、俳諧では発句だけを独立した作品として取り扱うようになった。残りの7-7の14音は対句と呼ばれて連歌では必ず発句に続くものと考えられていた。芭蕉は俳諧における滑稽さから、自然を通して詠まれる作品に思想性を加えて、偉大な文学的作品に高めて行った。代表作に「奥の細道」(1694年)がある。そして、18世紀には連歌形式の俳諧は下火になり、発句の作品が多く作られるようになった。

19世紀に入り、近代俳句の創始者と言われる正岡子規は明治26年(1893年)発句だけを独立させ、「俳句」と名づけた。子規は文学や美術の表現方法として事物の描写が大きな効果を持っていると考え、俳句においても「写生」の手法が重要視された。こうして、子規の俳句は簡潔なスタイルを持った視覚的なものとなった。こうして近代の俳句は確立されて行った。

## 8. 西洋での Haiku

俳句が西洋で作られるようになったのは、20世紀始め、フランス人である Julien Vocance, Paul-Louis Couchoud などによって日本の俳句が紹介されたことに始まる。かれらはフランス語で俳句を作り1905年に出版発表している。1910年には Michel Revon が日本の俳句選集をフランス語で紹介し、Basil Hall Chamberlain が "Japanese Poetry" の第2版を出版し、そこに "Basho and Japanese Poetical Epigram" というエッセイを載せ、俳句を紹介している。

1913年4月には Ezra Pound が雑誌 "Poetry" に "In a Station of the Metro" という題の詩を載せている。彼によるとこの詩は日本語の発句を参考にして作り、発句の技術的な面を称賛している。これが英語で作られた最初

の発句であると考えられている。

“In a Station of the Metro”

The apparition of these faces in the crowd:

Petals on a wet, black bough.

1915年には Lafcardio Hearn が “Japanese Lyrics” を出版し、発句を英訳している。また、1949年から1952年にかけて英国人の R.H. Blyth が “Haiku” を4版出版している。彼は日本の禅仏教を学び、俳句は禅の影響が多大であると確信していた。

アメリカでも印象派の “San Francisco Poets” やニューヨーク出身の “Beat Poets” のなかに発句に興味を持つものが出てきた。1952年には Gary Snyder が “Earth House Hold” という題名の句集を出版した。彼はその頃もうすでに道教や禅思想の勉強を始めていて、俳句に取り組んでいた。ここにその例を2つあげておく。

This morning:

floating face down in the water bucket

a drowned mouse.

leaning in the doorway whistling

a chipmunk popped out

listening

1955年には “Beat Poets” の代表者と言われる Allen Ginsberg が日記集を発表し、その中で俳句が詠まれている。彼によると俳句の創作は心の外側にある客観的な多数のイメージそのものを描くことであって、そのイメージ間の関係が心に感動を引き起こすのであり、決してその関係を説明するのではなく、俳句の主題となっているイメージを句に詠みあげることであると言

う。ここにその例を3つあげておく。

Looking over my shoulder  
my behind was covered  
with cherry blossoms.

“Winter Haiku”

I didn't know the names  
of the flowers — now  
my garden is gone.

Lying on my side  
in the void:  
The breath in my nose.

1958年には日本学術振興会より“Haikai and Haiku”が出版された。これは主に芭蕉、蕪村、一茶、子規などの作品を英訳したものでアメリカに俳句が知れ渡るきっかけとなった。同じ頃、Herold G. Hendersonの“An Introduction to Haiku”がアメリカに紹介されたり、Jack Kerouacが小説、“The Dharma Bums”の中で俳句が紹介され、それ以来アメリカで俳句がブームを引き起こすことになった。

その後1963年には雑誌“American Haiku”(Platteville, Wisconsin: 1963-68)がJames BullとDonald Eulertによって出版され、多くの詩人の俳句が紹介された。初期の版では自由な形式で俳句が詠まれたが、英語のシラブルを単位とした5-7-5の17シラブルの形が好まれた。1971年にはEric W. Amannがカナダで始められた雑誌“Haiku”(Toronto: 1967-71, New Jersey: 1971-76)をアメリカで出版し、日本の俳句やヨーロッパの俳句なども紹介した。彼は俳句に見られる禅の思想や「わび」、「さび」の表現などを強調

し、俳句のことを“Wordless poem”と評した。ここに彼の俳句を例として1つ挙げておく。

September rains,  
—— gout patients  
sit in the waiting room.  
Eric W. Amann

1976年にはLeroy Kantermanが広くアメリカの詩人から句を募り雑誌“Haiku West” (Forest Hills, New York: 1967-75)を編集した。彼はまた、1968年に“The Haiku Society of America in New York City”をHarold G. Hendersonが設立する際に尽力した。その他、1970年代中頃までに、アメリカでは数々の俳句に関する雑誌が出版された。そして、これらの中から俳句を選び出しいろいろな俳句集が編集されたが、1974年にCor van den Heuvelによって“The Haiku Anthology: English Language Haiku by Contemporary American and Canadian Poets”が出版された。

## 9. おわりにかえて

現在さまざまな教育機関で俳句を利用して英語教育が行われている。日本人の学習者にとって俳句は小学校の時からなじんできたもので一番身近に感じることの出来る文学の一つではなかろうか。インターネットを開けて俳句のトピックを検索してみるといくつも出てくる。今では世界各地で俳句コンテストが開かれているのがわかる。学習者が将来、外国に行って日本文化を紹介しようとした時、俳句は比較的簡単に紹介でき、また、当地の人達にも手軽に味わってもらえるのではなかろうか。中学校の英語教育を始め大学の英語教育まで学習者の英語のレベルに合わせて俳句を利用した教授法を用いることが出来ると考えられる。ここでは、おわりにかえて大学教養レベルの俳句を利用した英語の教授法を紹介する。

まず始めに日本の俳句を英訳したものと英詩との比較考察を通して、英語の俳句の特徴、例えば「切れ字」を「！」のマークで表わしていることなどを学習者に気付かせてイメージの表現方法を学習させる。ここで、一番大切なことは英詩では詩の中の状況、登場人物の行動などが事細かに説明されているのに対し、俳句では観察したイメージの関係などを説明するのではなく、イメージそのものを表現している点を気づかせることである。この際、トピックが良く似ている詩を比較すると分かりやすい。ここに、Muneo Yoshikawa の 2000 年度異文化コミュニケーション夏季セミナー (Japanese Mindscapes and Patterns of Communication) で配布された資料の中から一例を紹介する。

よく見れば ナズナ花咲く 垣根かな (芭蕉：1644-94)

When I look carefully

I see the nazuna blooming

By the Hedge!

Flower in the crannied wall,

I pluck you out of the crannies; —

Hold you here, root and all, in my hand,

Little flower - but if I could understand

What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is. (Tennyson: 1809-92)

次に読解および英語の俳句の音読を練習させる。まず、日本語の俳句を 30 程度集め、その中の好きな句を絵に描くなりして、俳句の持っているイメージを具象化して行く練習を行う。次に英語の俳句を紹介し同じような練習をする。そして、そのイメージがどこから来ているのかを考えさせる。人間の 5 官を通して具象化されるものなのか、作者の記憶にあるものが表現されて



いるのか、それともファンタジーの世界の出来事なのかをグループで話し合わせ、発表させる。次に、しっかりとイメージをとらえた上で英語の俳句の音読練習に入る。

その次には学習者に英語で俳句を作ってみさせる。5官を通して感じたものの、記憶から思い浮かんだもの、また空想の中で創作したものといろいろあるが、自分がとらえたイメージを3行の英文で表現させる。絵や写真を利用するのはイメージをわかせるのに効果的であると考えられる。俳句はイメージを説明するものではなく、文字を用いて描写するものであるということを学習者に理解させる。例えば、次の文章は俳句ではない。

“I was sad when I sew the dead cat.”

俳句では次のようになる。

dead cat...

open mouthed

to the pouring rain (Michael McClintock)

最後に学習者に自分の俳句を発表させるのだが、クラス内で俳句のコンテストを行い全員に良く出来たものを選ばせる方法もある。これは学習者に俳句を作らせる動機付けにもつながると考えられる (Walker and Kawana, 1998)。

以上俳句を用いた英語教授法の一例を見たが、自文化を利用した外国語の教授法を取り入れることにより、学習者にその言語が、自分の考えを表現する言葉であるということを実感させることができるのではないかと考えられる。そうすることによって、異文化コミュニケーションの場においても、外国語である英語を自分の言葉として、自信を持って使用できるようになると考えられる。

これからの課題として、この教授法に対する学習者の反応を報告して行きたい。

\*この小論は、平成10年度文部科学省在外研究および、平成11年度海外研修期間中における研究成果の一部である。

補遺1. 日本語俳句例集

古池や 蛙飛び込む 水の音 (芭蕉：1644-1694)

Old pond...

A frog leaps in

Water's sound (translated by W. J. Higginson)

枯れ枝に からすのとまりけり 秋の暮れ (芭蕉)

On a barren branch

A raven has perched ——

Autumn dusk (translated by W.J. Higginson)

しずかさや 岩にしみいる 蟬の声 (芭蕉)

The stillness ——

Soaking into stones

Cicada's cry (translated by W.J. Higginson)

いざ行かん 雪見にころぶ ところまで (芭蕉)

Well! let's go

Snow-viewing till

We tumble! (translated by W.J. Higginson)

雲おりおり 人の休むる 月見かな (芭蕉)

Clouds occasionally

Make a fellow relax

Moon-viewing! (translated by W.J. Higginson)

夕風や 水アオサギの はぎをうつ (蕪村：1716-1784)

Evening breeze...

Water laps the legs

Of the blue heron (translated by W.J. Higginson)

やなぎ散り しみず枯れ石 ところどころ (蕪村)

Willow leaves fallen

Clear waters dried up stones

One place and another (translated by W.J. Higginson)

田一枚 植えて立ち去る やなぎかな (蕪村)

Planting a patch

Of field and leaving ——

Ah, willow! (translated by W.J. Higginson)

橋なくて 日暮れんとする 春の水 (蕪村)

No bridge and

The sun ready to set

Waters of spring (translated by W.J. Higginson)

ぬすびとの 屋根に消え行く 夜寒かな (蕪村)

A thief

Vanishes over the rooftops

Night chill! (translated by W.J. Higginson)

やれうつな はえが手をする 足をする (一茶：1762-1826)

Oh, don't swat!

The fly rubs hands

Rubs feet (translated by W.J. Higginson)

秋の夜や 旅の男の 針仕事 (一茶)

Autumn night...

A traveling man's

Needlework (translated by W.J. Higginson)

涼風や 力いっぱい キリギリス (一茶)

Cool breeze...

With all his might

The katydid (translated by W.J. Higginson)

涼しさや 半月うごく たまり水 (一茶)

The coolness...

The half-moon shifts

Puddles (translated by W.J. Higginson)

朝露の アサガオ売るや 荒おとこ (一茶)

Morning-dewed

Morning glories he sells,

Rough fellow (translated by W.J. Higginson)

夏草や つわものどもが 夢のあと (子規：1867-1902)

Summer grass...

Those mighty warriors'

Dream-tracks (translated by W.J. Higginson)

漕ぎ出でて 霞の外の 海広し (子規)

Rowing through

Out of the mist

The wide sea (translated by W.J. Higginson)

秋晴れて ものの煙の 空にいる (子規)

Autumn clear ——

The smoke of something

Goes into the sky (translated by W.J. Higginson)

とお花火 音して何も なかりけり (川岸壁五郎：1873-1937)

Far fireworks

Sounding, otherwise

Not a thing (translated by W.J. Higginson)

雨晴れて しばらくバラの 匂いかな (高浜虚子：1874-1959)

Rain cleared ——

For a while the wild rose's

Fragrance (translated by W.J. Higginson)

旅せんと 思いし春も 暮れにけり (虚子)

This spring too

When I had thought to travel

Has ended (translated by W.J. Higginson)

履きぞめの ほうきや土に 慣れはじめ (虚子)

The first sweeping's

Broom... begins to get

Used to the soil (translated by W.J. Higginson)

壺にして 深山のほうの はなひらく (Mizuhara, Shuoshi: 1092-1981)

Stuck in a vase

Deep mountain magnolia

Blossoms open (translated by W.J. Higginson)

おおきい犬 立ち向かえたる さつき闇 (Mizuhara, Shuoshi)

The huge dog

Risen in greeting

June darkness (translated by W.J. Higginson)

桐の花 ひぐらし鳴くを あけとする (Hashimoto, Takako: 1899-1963)

Amid fog

To the clear-cicada cries

Dawn comes (translated by W.J. Higginson)

洗い髪 行くところ皆 しずくして (Hashimoto, Takako)

Fresh-washed hair

Everywhere I go

Making trickles (translated by W.J. Higginson)

あきあじの ばたばたはねる のをつかむ (Takahashi, Kazuo)

Autumn salmon

The flipping leaping

One I catch (translated by W.J. Higginson)

冬の星 故郷せせらぎ たえまなし (Matsuura, Takuya)

Winter stars —

Hometown brook murmuring

Incessantly (translated by W.J. Higginson)

補遺 2. 英語俳句例集

A baby crab

Climbs up my leg ——

Such clear water (W.J. Higginson)

On the first day of spring,

Snow falling

From one bough to another (Virginia Brady)

Wind:

The long hairs

On my neck (Larry Wiggan: 1974 The Haiku Anthology)

Snow falling

on the empty parking-lot:

Christmas Eve... (Eric W. Amann)

Spring dawn:

Turning toward the storm cloud,

I lost sight of the bird. (Julius Lester)

Billboards...

wet

in spring

rain... (Eric W. Amann)

Holding the water,  
held by it ——  
the dark mud. (William J. Higginson)

someone's newspaper  
drifts with the snow  
at 4 a.m. (Jack Cain)

Autumn twilight:  
the wreath on the door  
lifts in the wind. (Nicholas Virgilio)

walking the snow-crust  
not sinking  
sinking (Anita Virgil)

Into the blinding sun...  
the funeral procession's  
glaring headlights. (Nicholas Virgilio)

in the hotel lobby  
the bare bulb of a floor lamp  
shines down on its distant base (Con van den Heuvel)

dead cat...  
open mouthed  
to the pouring rain (Michael McClintock)



## 参考文献

- 片山嘉雄, 遠藤栄一, 佐々木昭, 松村幹男 1999. 『新・英語科教育の研究』大修館書店
- 日本大辞典刊行会 1991. 『日本国語大辞典』小学館
- 四ツ谷龍 2001. 『俳句の歴史』<http://www.big.or.jp/~loupe/links/jhistory/javant.shtml>
- Cummins, J. 1983. The Role of Primary Language Development in Promoting Educational Success for Language Minority Students, In California State Department of Education Office of Bilingual Bicultural Education (ed) *Schooling and Language Minority Students: A Theoretical Framework*. Los Angeles: Evaluation, Dissemination and Assessment Center.
- Henderson Harold, G. 1997. *Haiku in English*. Rutland, Vermont & Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- Higginson William J. 1985. *The HAIKU Handbook: How to Write, Share and Teach Haiku*. New York NY: Kodansha America.
- Krashen, S. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.
- Long, M. 1987. Native Speaker/Non-Native Speaker Conversation in the Second Language Classroom, In M. Long and J. Richards (eds) *Methodology in TESOL: A Book of Readings*. New York, NY: Newbury House.
- Skehan, P. 1998. *A Cognitive Approach to Language Learning*. Hong Kong: Oxford University Press.
- Swain, M. 1985. Communicative competence: some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development, In S. Gass and C. Madden (eds) *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass: Newbury House.
- Walker, Stuart and Kawana, N. 1998. Motivating Students Through Haiku, *JALT Hokkaido 1998 Proceedings*: 69-74.